様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ４ 月 １０ 日現在

機関番号：３０１０６
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2014～2017
課題番号：２６３７０４９６

研究課題名（和文）グローバル化社会で変容するアイデンティティーと言語変異の因果関係の理論モデル構築

研究課題名（英文）Theorizing a causal relationship between changing identity in a globalized community and language variation

研究代表者
高野　照司（Takano, Shoji）

北星学園大学・文学部・教授

研究者番号：００２８５５０３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,300,000円

研究成果の概要（和文）：グローバル化の最先端で劇的な社会変化が進行する地域社会において、土着方言の共時的変異・変化に話者の土着アイデンティティーがどのように関与しているのか、社会心理学的方法論を加味した計量的分析と質的洞察を融合しつつ、複眼的観点から因果関係の解明を試みた。研究成果として、土着アイデンティティーは、グローバル化に対するイデオロギー、自己観、土着方言や共通語に対する意識的、及び、潜在的言語態度などの社会心理的要因から複合的に構成される実在であり、アンケート調査で回答される方言使用の自意識と日常語における方言の無意識的使用の揺れとの間に見られる乖離が土着アイデンティティーで説明しうることを立証した。

研究成果の概要（英文）：Integrating qualitative information on speakers' social practice and research techniques from previous social psychological studies into the quantitative sociolinguistic paradigm, this study aims to theorize a causal relationship between variable local identities in a changing community under rapid globalization and synchronic variation in uses of a local dialect. The results show that local identity is a multi-faceted construct that consists of ideologies about globalization of the community, self-images, and both overt and covert attitudes toward local dialects and Standard Japanese. Speakers' responses to self-report questionnaires on their uses of a local dialect and topic-related style shifts to the local dialect in sociolinguistic interviews are found to be often mismatched, and the discrepancies can be accounted for by differing orientations to local identity.

研究分野：社会言語学

キーワード：アイデンティティー　言語態度　スタイルシフト　地域方言　言語変異　言語変化

１．研究開始当初の背景

ある言語の変異や変化を動機づける要因として、当該言語の使い手である話者自身のアイデンティティーの在り様が重要であることは言うまでもない。言語変異・変化研究の従来的枠組みにおいて、年齢・性別・社会階層・人種・民族性など比較的固定的とされた話者属性と言語変異の規則的関係は、国内外を問わず数多くの言語共同体で繰り返し実証されてきた（Labov 1972, 2001)。しかしながら、一定の社会心理やイデオロギーに基づく話者の自己実現欲求や対話者（時に地域社会全体）への働きかけが動機付けとなる話者アイデンティティーの言語的顕在化(Le Page & Tabouret-Keller 1985)は、言語運用場面において極めて流動的で捕らえ所が難しく、これまで国内外で試みられてきた先行研究は、分析パラダイムおよびそこから導かれる一般化において統一性を欠く。

例えば、国内の方言学では、アンケートによる意識調査に基づき、話者が抱く郷土への所属意識や忠誠心と土着語（vernacular）の維持（真田 1988, 真田・ロング 1992）には正の相関関係があるとの一般化が示されている。一方、海外の研究に目を向けると、話者の言語意識は多次元的とされ、アンケートなどで聴取しうる「顕在的」意識と公には明かされない「潜在的」意識は別物で、特にこの後者（潜在的意識）が言語変異や変化を方向づけるとする一般化もある（Kristiansen et al. 2005)。また、参与観察を通して話者の土着意識の在り方と自然談話における変異性を分析した研究では、土着語の保持と話者の土着志向性は常時一貫して正の相関関係に収まるわけではなく、話者が実生活で日々直面する言語運用上の職業的ニーズやそれと関連する人脈が変異性を決定づけるとされている（Nichols 1983, Edwards 1985)。さらには近年、話者アイデンティティーをより流動的でダイナミックな「社会構築概念」として捉える学派が台頭を見せている。話者アイデンティティーは、会話参与における対話者や話題への発話応化、そして自己実現欲求を動機付けとした話者の「社会的実践」であると考えられ、とりわけ話者の方略的言語使用やスタイル変異の「社会的意味」への質的洞察を援用しながら、話者アイデンティティーの機能・役割に切り込んでいくべきだとされている（Gumperz 1982, Rampton 1995, Eckert 2000, Bucholtz & Hall 2005,田中 2011, 高野 2012)。

以上の知見から明らかなように、言語変異・変化を左右する話者アイデンティティーの意義に関するこれまでの学術的蓄積は、多様かつ断片的で、包括的な理論化に向けた統合にまでは至っていない。本研究の主眼は、国内外の多彩な分析パラダイムおよび知見を統合し、複合的な観点から言語変異と話者アイデンティティーの関係性の緻密な記述に肉迫することで、国内外の架け橋となり得るような研究成果を発信することにある。

申請者が行った試行的研究（高野 2011, 2013）では、外客誘致産業により急速なグローバル化が進む地域社会（北海道ニセコ町）をフィールドに、劇的な生活変化に直面するニセコ住民が抱く土着意識や地域のグローバル化に対する個々のイデオロギーを観察し、住民のそうした社会心理がニセコ方言の変異パターンや変化にどのような影響を与え得るのかを検証した。その結果、上記の一般化に符号するかたちで、ニセコへの愛着が深くグローバル化に伴う生活変化に否定的なイデオロギーを持つ住民ほど、ニセコ方言保持の変異パターンを示すことが判明した(cf. Labov 1963)。

しかし一方で、従来の一般化からは予測し得ない新たな発見（下記 a,b）もあった。

a) グローバル化には前向き、且つ、外集団にも寛容で柔軟なイデオロギーを持つ話者もニセコ方言保持（つまり、共通語化とは逆）の傾向を示した。
b) 土着主義にもグローバル化にも無関心で、イデオロギーの所在が曖昧な話者が最も顕著な共通語化の傾向を示した。

一見、相矛盾するこれらの成果は、前述の先行研究（前頁）から派生する一般化の多様性にも通じ、話者アイデンティティーが「土着志向性」などといった一元的尺度に収まりうる単純な作業概念ではなく、より多面的で深淵な実在であることを意味している。これらの発見・考察を受け、本研究ではひき続きニセコ町をフィールドとして、社会心理学的知見を援用しながら、複数の異なる調査モードによる土着意識・イデオロギーのより綿密な分析を目指すこととした。

２．研究の目的

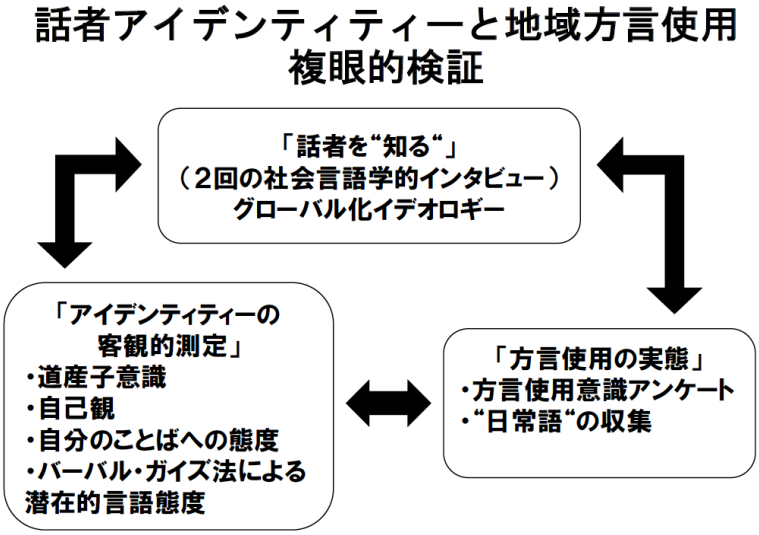
本研究の目的は、言語の変異・変化事象における話者のアイデンティティーが果たす役割や機能について、申請者が取り組んだ試行的研究（高野 2011, 2013）の成果をさらに発展させ、より包括的で汎用性のある定義・解釈を提示することにある。計量的分析を主軸とする言語変異・変化研究の従来的枠組みにおいて、ダイナミックで方略的な社会構築概念としてのアイデンティティーを、独立変数として理論モデルに組み込むための取り組みが著しく遅れている。本研究では、話者の言語意識に重きを置く国内の方言学からの学術的蓄積と、話者の社会的実践を中心とする欧米系変異理論の近年の革新的展開を積極的に融合し、国内外での方法論上の溝を埋める学際的アプローチを試みることで、より説明能力の高い理論モデルの構築に寄与することを目的とした。

３．研究の方法

本研究は、申請者自身が北海道ニセコ町ですでに行った先行研究（高野 2011, 2013）の方法論に社会心理学的観点から改良を加え、ニセコ方言の共時的変異・変化の生成に話者アイデンティティーがどのように関与しているのか、計量的分析と質的洞察を融合しつつ、複眼的観点から因果関係を解明することを目指す（下図参照）。特に、ダイナミックで流動的な「話者アイデンティティー」については、いくつかの異なる観点からの把握を試みる。

第一に、各被験者と最低２回の社会言語学的インタビュー（Labov 1972）を行い、各人の日常語の収集や社会的属性の把握だけでなく、ニセコ地区のグローバル化に対するイデオロギーの所在を明らかにする。第二に、自己観に関する社会心理学的研究と言語態度研究（Garrett, 2010）からの知見を援用し、４種類の異なるモードの調査ツール（①道産子意識（cf., 植松 2010）、②自己観（高田他 1996）、③母方言への意識的言語態度、④バーバル・ガイズ法による方言と共通語に対する無意識的言語態度）を用いて、多角的尺度から話者アイデンティティーの客観的測定、及び、数値化を行う。

各被験者の土着方言使用の実態については、第一に、北海道方言的語彙・文法の使用意識に関する従来的なアンケート調査（高野 2011, 2013 で作成済み）を実施する。第二に、当該アンケート調査による意識的方言使用と対比させる目的で、多様な話題から構成される社会言語学的インタビューを行い、各被験者の自然談話（日常語）も収集する。



アンケート調査から明らかになる方言使用意識における個人差、日常語における方言的音声の変異性と話す話題内容との規則的関係、及び、土着アイデンティティーの重要構成要素と想定される社会心理学的諸尺度（道産子意識、自己観、自分のことばへの態度、バーバル・ガイズ法による潜在的言語態度）などの因果関係を回帰分析（Rbrul など）などの統計的手段によって明らかにし、方言使用上の変異性（土着方言の保持）、及び、変化（共通語化）の「社会的意味」を明らかにする。

【引用文献】Bucholtz, M., & Hall, K. (2005). Identity and interaction: A sociocultural approach. *Discourse Studies* 7(4-5): 585-614. Eckert, P. (2000). *Language Variation as Social Practice.* Oxford: Basil Blackwell. Edwards, J. (1985). *Language, Society and Identity.* Oxford: Basil Blackwell. Garrett, P. (2010). *Attitudes to Language.* Cambridge: Cambridge University Press. Gumperz, J. (1982). *Language and Social Identity.* Cambridge: Cambridge University Press. Kristiansen, T., Garrett, P., & Coupland, N. (2005). Introducing subjectivities in language variation and change. *Acta Linguistica Hafniensia* 37: 9-35. Labov, W. (1963). The social motivation of a sound change. *Word* 19: 273-309. Labov, W. (1972). *Sociolinguistic Patterns.* Philadelphia, PA: University of Pennsylvania Press. Labov, W. (2001). *Principles of Linguistic Change: Social Factors.* Oxford: Blackwell. Le Page, R., & Tabouret-Keller, A. (1985). *Acts of Identity.* Cambridge: Cambridge University Press. Nichols, P. (1983). Linguistic options and choices for Black women in the rural South. In B. Thorne, C. Kramarae & N. Henley (eds.), *Language, Gender, and Soceity.* Rowley, MA: Newbury House. Pp. 54-68. Rampton, B. (1995). *Crossing: Language and Ethnicity among Adolescents.* London: Longman. 真田信治 (1988)「方言意識と方言使用の動態−中京圏における」『方言研究法の探索』秀英出版 41-80 頁 真田信治・ロングダニエル (1992)「方言とアイデンティティー」*言語* vol.21, No.10, 72-79 頁 高田利武・大本美千恵・清家美紀（1996）「相互独立的−相互協調的自己観尺度（改訂版）の作成」『奈良大学紀要』第 24 号 157-173 頁 高野照司（2011）「バリエーション研究の新たな展開」『日本語学』2011 年 11 月臨時増刊号（Vo.30-14）（特集　言語研究の新たな展開）256～275 頁 高野照司 (2012)

第 13 章「ことばのスタイルを理解し応用する」日比谷潤子編著『はじめて学ぶ社会言語学』ミネルヴァ書房　248-269 頁 高野照司 (2013)「ことばのバリエーションの「社会的意味」を伝達する能力～地域社会の急速なグローバル化がもたらす土着イデオロギーに着目して～」片岡邦好・池田桂子（編著）『コミュニケーション能力の諸相―変移・共創・身体化―』ひつじ書房 55～91 頁 田中ゆかり (2011)『「方言コスプレ」の時代』岩波書店 植松晃子（2010）「異文化環境における民族のアイデンティティーの役割」『パーソナリティー研究』第 19 巻　第 1 号 25-37 頁

４．研究成果

＜2014 年度＞

初年度は、特に社会言語学のみならず社会心理学などの隣接分野における先行研究のレビューを行い、話者のアイデンティティーや土着イデオロギーを多元的尺度から捉えるための質問紙やアンケート調査の草稿の作成に取り組んだ。

また、申請者による先行研究（高野 2011, 2013）の成果を含め、これまでの研究成果を海外へ発信する場として、国際学会 The Sociolinguistics of Globalization 2015（香港大学　2015 年 6 月 3-5 日）での口頭発表に応募し受理された。今年度の後半は、その発表に向けた分析作業および成果のとりまとめなどに大部分の時間を費やした。

年度末には被験者から得られた回答の点数化や自然発生的発話に観察される変異を従属変数として、独立変数の貢献度を測定する多変量解析プログラム（Rbrul）のワークショップに参加する機会を得た。これによりそれまで課題となっていた「土着志向性」「言語態度」「自己観」などを名目変数ではなく、より適切と思われる連続変数として捉えることができ、統計学的解析に含めることが可能になったことは、本研究計画上の大きな進展に繋がった。

＜2015 年度＞

当該年度 6 月、国際学会 The Sociolinguistics of Globalization 2015（香港大学　2015 年 6 月 3-5 日）において、前年度までの研究成果を口頭で発表した。当該発表では、主に過去の類似の研究成果を概観した上で、社会生活の急速なグローバル化に対するニセコ町生え抜き住民の態度やイデオロギーと方言使用意識の関連、及び、自然発生的な談話に観察される話題ごとの規則的変異に着目し、アンケート調査などで回答される方言使用についての明示的な意識と自然談話で観察される話題に依拠した無意識的な方言使用の揺れには隔たりがあり、話者の土着アイデンティティーと言語変異との関係性を論じるには、異なるモードでの言語データの収集と精査が不可欠であることを主張した。

社会心理学分野および言語態度研究における文献レビューを継続して行い、調査地であるニセコ地区での実施に適合するかたちで、話者の自己観、土着志向性、及び、母方言や共通語に対する言語態度などを調査するための調査票の作成を完了した。

また、申請者が分担者となっている別科研プロジェクト（基盤Ｂ）で行ってきた札幌市方言名詞アクセントの共通語化に関する実時間パネル調査と連動させるために、名詞アクセントの変異・変化を調査するための調査票もフィールドワークに加え、読み上げタスクによる名詞アクセントの変異も分析データとして収集することにした。札幌市方言の実時間調査との連携により、北海道の中心都市（札幌）で観察される変異・変化の動態とニセコ地区でのそれとを比較することができ、調査結果の考察にとってより有益なものとなった。

当該年度の後半からは、上記の各種調査票を用いたフィールドワークを本格的に開始した。また、これまで収集してきた日常語の分析作業も同時進行で行った。分析では、特に語頭以外のカ行子音やタ行子音の有声化に焦点を当て、各被験者が社会言語学的インタビューにおいて話す様々な話題に関連した規則的変異を見極め、地域社会の急速なグローバル化に対する話者のイデオロギーの在り方をこの規則的変異の重要な動機付けの一つとして特定するまでに至った。

また、上記分析作業においては、統計学的解析における新たな進展もあった。コンピューター・プラットフォームであるＲを用いた多変量解析（Rbrul）に精通することができ、特に言語運用における個人差が統計的解析にもたらすマイナス要素を是正する「混合効果モデル」を駆使した精緻な分析が可能となり、分析作業に積極的に組み込む段階に至った。

＜2016 年度＞

本年度は、前年度からの継続で、被験者（ニセコ住民）の自己観、土着志向性（道産子意識）、母方言や共通語に対する質問紙による顕在的言語態度を調査するためのフィールドワークを継続して行った。その過程で、言語態度研究の文献レビューから得られた知見を基に、マッチド・ガイズ調査法の応用型であるバーバル・ガイズ調査法（異なる日本語方言変種の実音声の聴取を刺激として、被験者が刺激音声の発話者に対して抱く印象や社会的評価を測定）を採用することとし、母方言や共通語に対して各被験者が抱く潜在的言語態度の検証を調査計画に追加した。申請者による先行調査（高野 2011, 2013）以降、調査が完了していた 18 名のニセコ町生

え抜き住民に再度接触し、上記の調査方法による再調査を行った。
　これまでの研究成果を海外に発信する目的で、6 月に国際学会 Sociolinguistics Symposium 21（スペイン・ムルシア市）において口頭発表を行った。当該発表では、自然談話音声の中から特に語頭以外のカ行子音の有声化を従属変数として、言語内的要因、話される話題の種類、グローバル化に対する土着イデオロギー等を独立変数とした多変量解析（Rbrul 分析）を行い、急激な社会変化に対してニセコ町住民が持つ土着イデオロギーの種類によって、話される話題がカ行子音の有声化に異なった影響力を及ぼすというスタイル的変異における因果関係を明らかにした。
　しかし、当該年度夏期に行った健康診断で病気が見つかり、精密検査等の通院を始め、年末に外科手術と入院、２月にも二度目の入院をしたため、当初予定していた研究活動に著しい遅延を生じた。結果的に、最終年度当初の研究計画を遂行することが不可能な状況となり、研究期間の延長願いを申請し承認された。

＜2017 年度＞
　研究期間の１年の延長により、最終年度となった今年度は、７月に予定されていた２度目の外科手術に向けた生活上の制約により、通常の研究活動の遂行が困難となり、本研究計画当初の予定よりもはるかに規模を縮小して調査を完了する対応策を講じた。それでも、前年度からの継続で、話者の自己観、土着志向性、共通語や地域方言に対する意識的言語態度、バーバル・ガイズ方式による潜在的言語態度などを調査するための４種類の調査を可能な限りで遂行し、ニセコ町生え抜き住民１９名に対する面接調査の完了をもって本研究のフィールドワークの終了とした。
　また、本調査開始時以降、ニセコ町が地域社会としてどのように変容したのかを把握するために、最新の人口統計資料を町役場の協力により入手した。また、ひらふ地区を中心として、外客誘致・観光関連商業施設の看板や広告、街角の案内掲示等を含めた言語的景観の変化をメディア等の記録に収めた。
　当該年度 8 月の退院以降、年度末にかけては、それまで収集してきたすべてのデータの統合的分析に時間を費やした。以下に列挙する分析結果の一部は、2018 年 3 月に開催された愛知大学人文社会学研究所主催ワークショップ『みんなの知らない方言の世界』において招待講演者として発表した。

<u>統合的分析による結果の概要</u>
　上掲 3 の「研究方法」に則り、各被験者の社会的属性や地域社会の変化に対するイデオロギーの様相を含めた質的洞察を融合することで、「土着アイデンティティー」を複眼的に捉え、方言使用上の変異性との因果関係を明らかにすることを主眼とした本研究プロジェクトでは、「土着アイデンティティー」という実在の複合性、それに複雑かつ規則的に絡み合う方言変異の実態、およびそれらの因果関係がある程度は解明できたと思われる。

- 「土着アイデンティティー」は、1)地域社会のグローバル化に対するイデオロギー（反対派・賛成派・中立派）、2)自己観（個の認識と主張・評価懸念・独断性・他者への親和と順応）、3)土着方言や共通語に対する意識的言語態度（連帯感・威信・標準意識・方言意識）、4）土着方言や共通語に対する潜在的言語態度（連帯感・威信・活力）などの社会心理的要因から複合的に構成されると見なされるべきであり、それらの構成要素は、方言使用に関するアンケート調査などから明らかになる方言使用意識と因果関係にある。
- 特に、グローバル化に対するイデオロギーの様相（反対派・賛成派・中立派）によって、方言使用意識は対照的に異なることが判明し、その派閥間差異の起因（動機付け）は、自己観、意識的言語態度、及び、潜在的言語態度の内容に密接に関連している。一方、道産子意識といった抽象的でマクロな尺度によるアイデンティティーの把握によっては、言語使用意識との規則的相関は見いだせなかった。
- 各被験者の日常語に観察される無意識的な方言使用上の変異（語頭以外のカ行子音の有声化）には、特にグローバル化に対するイデオロギーとの因果関係が内在しており、反対派住民ほど土着アイデンティティーが焦点化される話題において、方言的音声への無意識的なスタイルシフトによる土着方言誇示の傾向が観察された。一方、賛成派住民は、明示的なアンケート調査などによる方言使用意識では方言使用を強くアピールはするが、日常語における無意識的な方言保持傾向は反対派住民ほど顕著ではなかった。つまり、収集される言語運用データの特性によって、「土着アイデンティティー」の言語的な顕在化の様相は異なってくるわけで、今後同類の調査が行われる場合の有益な知見となりうる。
- 地域社会のグローバル化に中立的な住民ほど、土着意識や言語意識全般が希薄で、土着方言の共通語化を進める先鋒的存在になり得る。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１件）
Takano, Shoji & Ota, Ichiro. (2017). A sociophonetic approach to variation in Japanese pitch realizations: Region, age, gender and stylistic parameters. *Asia-Pacific Language Variation* 3: 5-40. （査読あり）

〔学会発表〕（計３件）
① Takano, Shoji. (2015). Attitudes toward rapid globalization of a rural community and speaker-oriented style-shifts: The case of Niseko in Hokkaido. Paper presented at the Sociolinguistics of Globalization 2015, University of Hong Kong（査読あり）
② Takano, Shoji. (2016). Mode-sensitive linguistic performance of locally constructed ideologies: The case of a rural community transformed under rapid globalization. Paper presented at Sociolinguistic Symposium 21, University of Murcia, Spain. （査読あり）
③ 高野照司（2018）「方言とアイデンティティー：「自分らしさ」の拠り所としての方言」愛知大学人文社会学研究所主催ワークショップ『みんなの知らない方言の世界』（招待講演）

〔図書〕（計０件）
なし

〔産業財産権〕
なし

〔その他〕
なし

６．研究組織
(1)研究代表者
高野照司（TAKANO Shoji）
　北星学園大学・文学部・教授
　研究者番号：00285503

(2)研究分担者
なし

(3)連携研究者
なし

(4)研究協力者
なし